

受講番号 18042 学校名 窪川高等学校定時制 氏名 生野 幸

研究の背景

研究対象(学年、クラス等) 1年生 生徒数 2 名
 科目名 英語 単位数(授業時数) 2 時間 使用教科書名 ENGLISH NOW I

クラスの様子・特徴

定時制1年生男女各1名のクラスで、ほぼ同年齢である。適度に距離を保ち、互いに気遣いも見られ、和気藹々とした雰囲気である。アンケートによると、英語は「好き」と「嫌い」に分かれている。2名とも授業態度は真面目で、熱心に学習に取り組んでいる。

問題の確定

基礎的な文法事項の定着が十分ではなく、自信のなさが見られる。そのため、自己表現やコミュニケーション活動が苦手である。

予備調査

A 授業の観察

授業への取り組みやクラスの雰囲気はとてもよい。中学校での基礎的な事項はある程度読むことができ、覚えている部分もあるが、定着しているとは言い難い。自分のことを述べたりする活動が苦手で、日本語でも戸惑いを隠せず、時間がかかる。

B 生徒による授業評価

授業アンケートを見る限り、授業の内容や進め方、また生徒自身の授業への取り組みや内容理解は、「満足」「ほぼ満足」となっている。理解したい・覚えたいという生徒の要求がしっかりしており、その要求に応える授業を目指さなくてはならない。

C 学力データ

・1学期定期テスト平均点(中間・期末とも80点台)
 ・基礎的な英単語100(使用教科書に出てくる中学校既習語の中から名詞のみ)の読みと意味のテスト2回の平均(読むことができる単語80%、意味のわかる単語65%)

リサーチ・クエスト

自己表現が苦手なクラスにおいて、どのように指導すれば、基礎的な英語力が定着し、既習の語彙や構文を利用して自分や自分の周りのことを伝えることができるようになるのか。

仮説・実践・検証

仮説1

授業の最初に、簡単なQ & A活動を取り入れることで、発話や自己表現を促すきっかけになるのではないかと。

実践1

天気や、復習の表現の中から簡単なものを選び、質問して答えてもらった。質問は単調にならないように、かつあまり負担を与えないように工夫したが、ややもすると"It's so hot, isn't it?"や"How are you today?"などで始まることもあった。単語だけでも、またわからない場合は日本語でも可とし、自分のことばで述べるよう促した。その際はヒントを出したり板書き確認させた。

検証1

当初新出の単語が出てくると、困った表情でことばが出てこなかった。しかし、徐々にQ & Aに慣れ、雷雨のあった日には"thunder"と答えが出た。週末の予定を尋ねることが時々あるが、尋ねないと生徒から催促される場面も出てきており、質問に答えようとする習慣が定着しつつある。関心のある出来事やニュース、行事や授業内容と関連づけて、短時間でも内容のある活動とすることで、今後より効果的になりうると思われる。

仮説2

中学校既習の単語を繰り返し学習し、定期的に確認することで、読んで書いて理解して覚えるという英語の基礎的な学習が定着するのではないかと。

実践2

使用教科書に出ている中学校既習単語200語をピックアップし、少しずつ授業の最初に小テストを実施する予定であった。2学期末現在まだ100語が終了した段階である。また、当初の計画では、50語のまとまりで小テストの範囲とする予定であったが、スベルが覚えにくいと、範囲や問題数を減らし、15～25語程度の範囲から10～20問出題している。返却時に訂正と音読をし、確認している。

検証2

単語小テストと定期テストの平均得点率がともに80%を超えており、基礎的な英語学習がなされていることを示している。ただ、範囲が少なく、試験形式・問題数が限定されていることに加え、同じ単語での誤りや初歩的な文法事項の躓きがあり、定着がよいとは言えない。読むことができるようにする指導と、読んで書いて覚えるという基礎的な学習の指導と、その両方をうまく活用し定着を図る必要がある。

仮説3

単語や構文などを中心に音読を工夫することで、学習の定着がなされ、outputへと進むのではないかと。

実践3

教材のCDを用いて単語や本文のリスニングで導入を行い、その際リスニングのポイントを挙げておく。音読については、単語や文章などをCDや教員の後について読むだけでなく、できるだけ多彩な音読法を試みた。音読は声も出ており積極的である。置き換えから書き換えへ、そして対話へと進めていこうとするが、自分のことを伝えるとなると、既習の単語や構文では間に合わないことが多く、手助けも時間が必要となる。

検証3

教材が平易であり、生徒は積極的に音読している。ただ、音読がある程度できても、単語や構文が確実に定着しているとは言い難い。また特定の授業時には応用できても、場面が違うと困難なケースが多々あった。自分の考えを英語にして発話まで発展させるためには、音読から定着までの過程に、もっと緻密な計画・指導が必要である。現段階では声に出すことによって英文に馴染みやすくなっており、発話を促すきっかけにはなっている。

研究の成果

相手に何かを伝えよう、英語を媒体に意思疎通を図ろうとする姿勢は徐々に身についてきたと思われる。また、単語や構文を読んで覚える学習もできつつあり、単語テストや授業アンケートの結果からも、ある程度の成果は見られる。しかし、「英語で自分や周りのことを伝える」までには至っておらず、今後も実践を積み重ねていかなくてはならない。目標を設定し、計画・実践・検証・見直しを実行することによって、生徒とともに授業を作り、よりよいものにしていくという授業改善の意識・手順を経験できたことは、大きな成果である。

今後の授業改善の課題

単語の定着や発話の促進など、今後取り組む項目が残されている。実践を意識して、授業の進度が予定より遅れており、限られた時間で実施するためには、一層の教材の精選と進め方の工夫が必要である。教員としてやってみたい目指したい授業と、生徒の受けたいと思う授業がずれていると感じた場合、その共通点・接点を見出すためには、自己の授業に対する確信とともに、柔軟な対応、授業改善への意欲を持ちつづける必要がある。

リサーチについての問合せ先:

職場電話

0880-22-1215

電子メール

yuki_ubuno@kt5.kochinet.ed.jp